様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２５０７

研究課題名（和文）ゴジャール・ワヒー語記述文法書の作成

研究課題名（英文）Research on Gojal Wakhi; Compilation of its descriptive grammar

研究代表者
吉枝　聡子（YOSHIE, Satoko）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：２０３１３２７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：(1)関係詞文，指示詞，方向詞・方向表現などのトピックを中心に文法分析を行った。関係詞については，多様な用法が認められる関係詞タイプを構造的・機能的特徴から分類し，そのメカニズムの解明と話者間に見られる用法上の混乱との関連性について分析し，論文として報告した。指示詞・方向詞については，基礎データを収集し，その選択のプロセスに関わる諸要素との関連性について調査研究を行った。
(2)同言語辞書について，新語彙・用例収集と語義クロスチェック，ならびに画像資料との照合作業を行い，出版準備作業を進めた。

研究成果の概要（英文）：1)The Gojal Wakhi grammatical system, the relative clauses and the demonstratives and the directives or directive expressions among others, were closely examined and analyzed. The paper concerning the relative clause construction and its use was published: the mechanism of the construction of relative clauses in Gojal Wakhi and some typological characteristics, the complexity or confusion in use, which was caused by the abundance of its variation, were clarified. 2)Over 13,000 words were so far gathered. All the items, some of which were attached with image data, were crosschecked by three informants. Some words whose meaning was already or nearly lost need still further confirmation, however, all the checked items are now ready to be published.

研究分野：言語学

キーワード：イラン諸語　パミール諸語　ワヒー語　東イラン語　ゴジャール　フンザ　少数言語　記述言語学

１．研究開始当初の背景

ワヒー語は，イラン語派パミール諸語に属する言語で，アフガニスタン，タジキスタン，中国新彊ウイグル自治区，パキスタン・ゴジャール地域（ギルギット－バルティスタン州・上部フンザ地方）およびヤスィーン地域にまたがる，パミール山岳地帯に分布する。パミール諸語の中で最大の話者を有し，分布域によってアフガニスタン・ワヒー語，タジク・ワヒー語，パキスタン側のゴジャール・ワヒー語の３変種が存在する。いずれも無文字言語である。

これまで，タジク・ワヒー語に関しては，Grunberg & Kaminsky（1988）や Pahalina (1975) らによる辞書が出版されるなど，十分とは言えないながらも報告がなされてきた。しかしながら，パキスタン側のゴジャール・ワヒー語は，系統不明の孤立言語としてつとに著名な隣接言語ブルシャスキー語に対する調査研究ブームの影で，しかるべき調査研究の対象となってこなかった。同言語については，Lorimer (私家版 1958 年出版，調査は 1935 年) 以降，Morgenstierne (1938）による簡略な記述，Reinhold(2006 ）によるテキスト訳，Felmy(1996)による小規模な民俗学関連文献が出版されたのみである。ゴジャール・ワヒー語に関する研究の遅れは，イラン諸語概説書中におけるワヒー語に関する記述――例えば Schmitt(1987)ではタジク・ワヒー語のデータのみ提供，Windfuhr (2009)では異変種のデータが混在，混乱した記述が多数確認される――などを見れば，たちどころに明らかである。

パキスタン北部のゴジャール地方は，1974 年のパキスタン併合時まで藩王による事実上の自治が認められていた。高度 7000m を越す峻嶮な山岳地帯に囲まれ，地理的に孤立した同地方は 1978 年のカラコルム・ハイウェイ開通まで名だたる辺境であった。ここでは，現地特有の伝統的生業・社会形態，言語面では古形を残す文法形態・語彙が今もなお保持されている。

申請者は，このような背景から，H16～H18 年度に科研費（若手研究 B「ゴジャール・ワヒー語の調査研究—基礎語彙および民俗・民族誌資料の収集と分析」No.16720084），H19～22 年度に科研費（基盤研究 B「ゴジャール・ワヒー語圏の調査研究－文法分析・比較基礎語彙と民俗誌資料の採集・分析」No.19401418，自然災害による現地調査延期により H23 年度まで繰越）を受け，現地のエコロジーや伝統的な社会・生業形態，習俗，祭祀，宗教・通過儀礼，社会構造，人間関係等を表す語彙を収集した。現地では良好な人的ネットワークと調査環境に恵まれ，予定を大幅に上回る上質な語彙データ約 11,000 語を採録することができた。しかしその一方で，イスマーイール派系財団の農村開発援助等による近代的教育の導入や伝統生業形態の変化により，農事暦・祭礼の廃止や関連習俗の消失など，その伝統的形態が急速に失われていく状況を目の当たりにし，調査の緊急性と必要性を痛感した。このような経緯から，収録語彙にさらなる考察とデータの拡充を加えた包括的なワヒー語辞書の編纂・出版を目ざし，H24～26 年度に科研費（基盤研究 C「ゴジャール・ワヒー語辞書の編纂とデータベース構築」No.24520456）を受け，調査研究を継続するに至った。

２．研究の目的

以上のように，ゴジャール・ワヒー語における調査研究の緊急性や現地の要請を認識しながら，総合的な言語調査を志してきた。幸運にも早期に質・量に恵まれた語彙が収録できたため，辞書編纂等の語彙面での作業を優先的に進めたが，本来，未記述言語に対する言語学的調査は，文法書等による文法分析の成果こそがその中心となるものであり，文法面に関する詳細かつ包括的な報告がなければ，片手落ちと言わざるを得ない。

以上の経緯をふまえ，本研究では，ゴジャール・ワヒー語に関する最初の記述文法書を作成して関連学界に提供し，イラン諸語における同言語の位置づけを明らかにすると同時に，その成果を，実用例を考慮したゆるやかな規範文法の形で現地に還元し，その要請に応えることを目的とした。

同言語の文法組織に関しては，音韻・文法体系に関わる基礎データは収集済みであるが，まだなお多くの文法事項が，その機能が未解明のまま残されている。さらに，規範言語をもたない無文字言語という性格ゆえに，同言語では用法上の変異やゆれが当初の予想をはるかに超えて存在しており，一部の文法事象についてはその混乱の状況さえ把握しきれていないのが実情である。記述文法書の作成には，まず，これらの語法上に認められる様々なバリエーションを記録し，整理して規範形を探り出しつつ，各々の文法事象の機能について考察していく必要がある。また，これまでの調査では，言語が置かれた政治的背景の相違から，ペルシア語の影響を強く受け「ペルシア語化」が進んだ他ワヒー語変種に比べ，ゴジャール・ワヒー語は，言語的により古形を残すことが確認されている。本研究では，これらのゴジャール・ワヒー語とワヒー語他変種との比較分析を行うことにより，イラン諸語におけるゴジャール・ワヒー語の位置づけを明示することを目指す。従って，

1)音韻・文法体系に関する基礎的情報を再確認のうえ，提供する

2)語用上の混乱や変異を含めた使用現状を可能な限り詳細に整理して記録する

3)同言語の言語的特殊性・独自性を示し，その位置づけを明らかにする

の３点を，本言語研究の主眼点とする。

３．研究の方法

ゴジャール・ワヒー語記述文法書の作成のための，①ゴジャール・ワヒー語中心域調査（文法データの収集と文法分析，民話・民俗誌関連の言語テキストの収集），ならびに，②イラン諸語における同言語の位置づけのための文法調査票の作成と，ワヒー語他変種に関する調査，および他変種間の差異に関する考察・研究，③上記①②の成果に基づいた記述文法執筆準備作業，を主な内容とする。

①の調査対象域は，パキスタン・ゴジャール地方の主要３村落（Gulmit, Sisuni, Pasu 村）を中心とし，文法分析や用例収集については３名の現地インフォーマントに協力を依頼しながら進める。

文法分析作業については，まず，これまでに得られている音韻面・形態面の基本事項を再確認し，それに平行して，使用現状や機能が十分に解明されていない文法事象を中心に，データ収集と分析を行う。なお，研究当初は，能格構文や格標示システム，いわゆる moving particles（古代イラン語期の前接的人称接辞に由来すると考えられ，出現位置に特徴がある，パミール諸語特有の文法現象とされる），を主要なトピックとして調査対象とする予定であった。しかしながら，用法上の混乱が予想よりも顕著に認められることが明らかになった関係詞文や，指示詞（通常近称・遠称の２系列の指示システムをもつイラン語において，中期イラン語のソグド語と，ゴジャール・ワヒー語のみが３系列をもつため，同言語の言語系統を考察する上で重要である），方向詞・方向表現（他のイラン語に比べ例外的に複雑な使い分けがなされる）等について，その使用実態の記録とメカニズムの解明がより重要であると考え，優先的にインフォーマントへの聞き取りによるデータ収集と分析作業を行った。

４．研究成果

本研究期間で得られた研究成果は，大きく (1)文法分析と記述文法執筆準備, (2)その他の，辞書編纂・出版準備作業，にまとめることができる。以下に概略を記す。

(1)文法分析関連

研究方法で述べたように，本研究期間では主に，1)関係詞文と 2)指示詞・方向詞を主な調査対象とした。得られた成果は以下の通りである。

1)関係詞文

ゴジャール・ワヒー語の関係詞は，kumd, ki, tse の組み合わせによって表され，同一の内容に対して複数の表現による表示が可能である。これらの関係詞文は類似の構造をもつため，話者間で混乱が生じたり，文によって適格文・非適格文の扱いが異なるなど，不安定な使用実態が見て取れる。例えば，主要部が関係節の主語である「あそこに立っている(dra vrvsetk)少年(kaṣ)」については kumd, ki, tse を組み合わせた 4 通り（ya kaṣ kumd ki dra vrvsetk / ya kaṣ ki kumd dra vrvsetk / kumd kaṣ ki dra vrvsetk / ya kaṣ dra tse vrvsetk)が可能である。また主要部が直接目的語になる「君が持ってきたグラス」に対しては，実に 5 通りの形が可能である。これらは，関係詞 tse を用いた，明らかに他と異なる形を除けば，それぞれ kumd と ki の位置が入れ替わっただけの類似の形式を持っており，話者も混乱をきたす場面がしばしば見られる。また，形によっては話者によっては非文と認識されるたり，後に続く主節によって「グレー度」が異なるなど，その適格性についてインフォーマントの判断が分かれる場合も多い。

以上をふまえ，本研究では，ゴジャール・ワヒー語の関係節形成とその使用現状を概観し，そのメカニズムの解明と，類型論的位置づけを試みた。以下に分析結果を記す。

ゴジャール・ワヒー語の関係節は，大きく以下の３つに分類される。各々については，一部の要素が省略，あるいは他要素が臨時に付加されたバリエーションも観察される。

①主要部＋kumd＋ki

ゴジャール・ワヒー語の関係節で最も基本的な形式で，関係詞 kumd と ki によって導かれる関係節が主要部（先行詞）に後続するタイプである。kumd は本来，疑問代名詞または疑問形容詞（「どちら；どちらの」）として用いられるが，関係節構文では関係詞として機能する。先行詞の定性が強い場合には，主要部の前に指示詞 ya などが置かれることもある。この関係節型では，kumd は先行詞の関係詞節における働きに応じて変化し，いわゆる「Moving Particles」やアスペクト辞などの前接辞も kumd に付加される。関係節内では主要部は空所となる。この点で，このタイプの関係節における kumd は関係代名詞的機能を有すると言ってよい。kumd ki を用いた関係節は極めて生産的であり，関係節化に関わるすべての階層について，形成が可能である。

また，このタイプの関係節内は主要部空所型となるが，主要部が所格や奪格，前置詞の目的語など，関係節化に関わる階層の下側に属する場合，関係節内で代名詞等が残存する，より明示的な形式を用いることがある。この場合には関係詞 kumd は変化せず，主要部の関係節内における機能は対応する形式によって示される。

②主要部＋tse

ゴジャール・ワヒー語では，tse を用いた関係節も，会話文等のくだけた文を中心に，高頻度に観察される。tse は従属節標識として機能し，副詞節等も導く他，関係節構文では単独で関係節を導くことができる。tse が従属節を導く場合の位置は特徴的で，kumd ki のように先行詞に後続するのでなく，主として関係節内の動詞の前に置かれる。tse は常に不変化であり，このタイプの関係節における主要部の機能は，主要部自体の変化によって示される。

③kumd＋主要部＋ki
kumd が主要部の前に立ち，ki と挟み込む形で関係節を形成する。この kumd は，Noun Phrase Accessibility Hierarchy における属格から下の階層については関係節化することができない。主要部の関係節内における機能は主要部自体の変化によって示される。

この型は，タジク側も含め，ワヒー語に関する先行研究では報告されておらず，ワヒー語については未報告の，①②とは異なる「主要部内在型」をもつ新たな現象とみなすことができる。

Keenan & Comrie (1977)や Lehmann (1986)等による，関係節形成に関わる類型論的分析では，関係節は，節と主要部の位置関係によって，主要部外在型と主要部内在型に分類される。これに従えば，①の主要部＋kumd ki は，主要部が関係詞節に先行し関係節の外に位置するという点で，「主要部外在型」となる。一方，③kumd＋主要部タイプでは，関係節の主要部が先行する kumd で始まる関係節の内部に位置している点で，「主要部内在型」に分類できるといってよい。つまりこの分類に従えば，ゴジャール・ワヒー語は「主要部内在型」と「主要部外在型」関係節の両方を持つことになる。

なお，タジク・ワヒー語の関係節に関する詳細な報告は，現在のところ Grünberg & Steblin-Kamensky(1988)にほぼ限られており，今後のさらなる詳細な調査が必要である。しかしながら，③のタイプはタジク・ワヒー語では未確認であり，パキスタン側のワヒー語でのみ生じている現象ということが可能である。その理由は，各々のワヒー語が置かれている背景に求めることができる。

ゴジャール・ワヒー語は，故地から現地への移住・定着時までは，彼らが信仰するイスラーム教イスマーイール派の宗教言語であり支配階級の教養言語であるペルシア語（＝タジク語）の影響を常に受けてきた。しかし 19 世紀後半以降は，1947 年のパキスタン分離独立，藩主制廃止とフンザ藩主国のパキスタン併合といった政治変動を経て，ウルドゥー語が地域の優勢言語になっている。現在では，ゴジャール・ワヒー語話者のほぼ全員が，ウルドゥー語とワヒー語との二言語併用者と言ってよい。詳細は省くが，ウルドゥー語の関係節は，ゴジャール・ワヒー語の関係節で構造上の類似性を示す点もあることから，ゴジャール・ワヒー語のみに観察されるこの関係詞型は，ウルドゥー語からの借用または何らかの影響を受けたものと考えることも，十分可能である。ゴジャール・ワヒー語をめぐる，19 世紀後半から現在に至る政治的・言語的環境の劇的な変化は，この現象を，近年における急激なウルドゥー語との言語接触と「脱ペルシア語化」がゴジャール・ワヒー語にもたらした，新たな関係節型と位置づける動機としては十分である。

④kumd＋主要部+ki のバリエーション：ki...kumd＋主要部タイプ
さらに上記③には，関係節内の一部の要素が，トピック標識 ki を伴って文頭に立ち，後半の ki が重複を避けるために省略された，一種の変形パターンをもつ。この文は一見，①主要部＋kumd ki 型の，kumd と ki の語順が誤って逆転したような形に見える。しかしよく見ると，このタイプの関係節の主要部は本来の関係詞 kumd に後続しており，主要部に kumd ki が後続する①とは根本的に異なる構造を取っている。

この種バリエーションに見られる ki は，実際は，③の kumd＋主要部タイプにおいて，関係節内の人物（特に人称代名詞）や，前置詞句・副詞句が，強調のために臨時に文頭に出た場合に観察されることが多い。つまり，この ki は①の kumd ki 等に認められる，関係詞の一部としての ki ではなく，臨時に文頭に出た要素に付加される，トピック標識の一種であると考えられる。これは，ペルシア語を初めとするイラン系言語にはしばしば認められる現象である。つまり，外見上は①主要部＋kumd ki タイプの語順が逆転したかに見えるこの例は，実は③kumd＋主要部＋ki 型に属するバリエーションであり，本来 kumd と共起して関係詞 (kumd ... ki)を形成するはずの ki は，前に出たトピック辞 ki との重複を避けるため省略されたと解釈することが可能である。

この結果，ゴジャール・ワヒー語では，類似の形式を持つ関係節型が存在することに加えて，一部には，同一形式で異機能を持つ ki が含まれるバリエーションも存在しており，このことが，話者による関係詞型の混同や使用上のエラーを引き起こす原因となっていることが分かる。一般的に，このような紛らわしい用法を持つ関係節は，構造的に脆弱なものから排除されるなど，何らかの手段で集約される方向に向かうことが予見できる。しかしその使用現状を見る限り，関係詞の多数のバリエーションにそのような動きは認められない。この理由としては，ゴジャール・ワヒー語の関係節構文は，埋め込み型に加え，主文で相関詞を用いて主要語を再標示できる，より明示的な接合型の両方が用いられる点が指摘できる。

埋め込み型とは，主節内に関係節が埋め込まれるタイプ（ex.「フェラーサトがした話は本当だ」）で，上記の①~③すべての関係詞タイプで見られる。ただし，埋め込み型が認められるのは，主要部が主節の主語または直接目的語になる場合や，分裂文中がほとんどである。主要部が主節内で属格である場合では，埋め込み型で表示することは難しく，この場合は接合型をとり，主要部が主節における近称・遠称等の相関詞によって受け直されるのが普通である。なお，主要部が主節の直接目的語となる場合は，述部が関係節の前に

出ることが多い。
　一方で，ゴジャール・ワヒー語の関係節構文は多くの場合，上のような埋め込み型でなく，関係節の主要部が主節内で，近称・遠称等の相関詞によって受け直される形式をとる（ex.「フェラーサトがした話は，あれは本当だ」）。この種の文では，関係節は主節と統語的関係になく，主節に付加または接合的に提示される形になっている。Comrie(1981)，Lehmann(1986)等では接合型または付加型(adjoined)と呼ばれるタイプである。
　ゴジャール・ワヒー語では，このタイプの接合型はすべての関係詞タイプで見られ，「埋め込み型」よりも，圧倒的に使用頻度が高い。しかも，本来は関係節の主要部に対応するはずの相関詞は，関係節内の複数の要素のうち，認知的前提が明確であるものを主節で受け直すことが可能である。このように，一種のリカバリーが可能となるため，接合型文では，構造的にはエラー文と予測されるが，話者によっては非文でないと判断される場合や，主節の相関詞が関係詞の主要部と一致しない例，また共通の関係節を持つにもかかわらず，主節における相関詞の標示対象が異なる例も，多数確認される。言ってみれば，接合型がもつこの明示性・柔軟性が，ゴジャール・ワヒー語の紛らわしい関係節型の共存を許容し，実用上は，関係節の構造に少々のエラーが生じても，これを吸収し論理構造のつじつまを合わせて，曖昧性を回避する役割を果たしていると言える。

2)指示詞・方向詞
　指示詞・方向詞については，インフォーマント調査により，基礎的な関連データを収集し，現在は最終的な分析作業を進め，発表準備を行ってところである。現在までに，以下の成果が得られた：
　ゴジャール・ワヒー語では，方向詞が指示詞との縮約形をとり，複雑な形態を示すが，これを包括的に記述した報告はこれまで行われていない。本研究では，この縮約形に関して詳細かつ包括的なデータを集め，整理した。加えて，込み入った用法を示す方向詞を用いた方向表現については，出発点（または話者）と到達点の間の空間・場所・方向に存在する，上下・高低・障害物の有無・可視性・または心的距離等の様々な要素が，これらの用法を選択するプロセスに関与することが明らかとなった。また調査の過程において，これらの研究には，さらに認知言語学的視点を加えることが効果的であると考えられるため，現在は，空間認知の観点を加えて分析を進めている段階である。なお，イラン系言語の中で特徴的な使い分けを示す指示詞については，基礎データは収集したものの全体像の解明には残念ながら至らなかったが，今後も調査研究を進め，方向詞に関する分析結果とも併せて，なるべく早い機会に成果を発表したいと考えている。

(2)その他
　本研究の主要な作業内容とはなっていないが，(1)の文法分析作業と平行して行った，辞書編纂作業についても記しておく。同言語については，本研究開始時までに 13,000 語超の語彙を収集済みであったが，現地調査時にも引き続き聞き取り作業を継続し，新語彙と用例収集を行った。さらに，用例確認や語義の最終的なクロスチェック，辞書に掲載予定の資料写真との照合・確認作業を行ってきた。ワヒー語辞書については 2018 年度の出版を目指しており，現在準備作業を進めている。
　最後に，調査方法②で予定していた，タジク・ワヒー語を初めとする他変種との比較・考察については，タジキスタン側ワハン地域の現地情勢の影響から，残念ながら調査を実施することが叶わなかった。しかしながら，ワヒー語における「ペルシア語化」現象は，同言語の包括的記述を行う上では不可欠の研究視点であり，将来的にはぜひ調査研究を行っていきたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

1)吉枝聡子 2017「情報標示の諸要素：ペルシア語」『語学研究所論集』第 22 号,東京外国語大学語学研究所（原稿提出済，2018 年刊行予定）査読有.

2)吉枝聡子 2016「ゴジャール・ワヒー語の関係節構文」『東京外国語大学論集』第 92 号，東京外国語大学, pp.273-91.

3)吉枝聡子 2016「ペルシア語の名詞述語文と情報構造」『語学研究所論集』第 21 号,東京外国語大学語学研究所，pp.117-24. 査読有.

〔図書〕（計 4 件）

1)吉枝聡子「現代ペルシア語事情」『現代イランを知るための 66 章』明石書店（原稿提出済，2018 年刊行予定）

2)吉枝聡子「クルド語はどんな言語か」『クルディスタンを知るための 45 章』明石書店（原稿提出済，2018 年刊行予定）.

3)吉岡乾編 2017『なくなりそうな世界のことば』創元社
（ワヒー語に関するデータを提供）

4)吉枝聡子 2016「母語の誉れ，そのわけは....」『言葉から社会を考える』，白水社，pp.116-9.

〔その他〕
・雑誌等（計 2 件）
1)吉枝聡子 2018「もっと知りたい世界のことば，ペルシア語」『英語教育』Vol.66.No.12，大修館, p.41.

2)吉枝聡子「新地名誕生！」『月刊みんぱく』2018/３月号, p.20.

・ホームページ等
ワヒー語サーチ
http://www.coelang.tufs.ac.jp/multilingual_corpus/wakhi/

６．研究組織
(1)研究代表者
吉枝 聡子（YOSHIE Satoko)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号：20313273